期 待 の 不 確 認 に 関 す る 一 研 究¹

大阪教育大学 工 藤 力²

これまで動機づけの特徴を持つ認知的不協和に関して Festinger (1957) は認知要素間のくいちがいによって、Brehm & Cohen (1962) は Commitment と Volition の導入によって定義づけてきた。Aronson & Carlsmith (1962) はこれらと異なり、何が何と協和であり不協和であるかの決定因子は、そこに働く期待水準にあるとした。彼らは、個人の課題に関する遂行期待（自己概念）と、この期待と不一致な行動に関する認知との間に認知的不協和が生起するとの考えのもとに実験的研究をおこない、我々が課題に対して持つ期待の不確認状態³は、認知的不協和を喚起させるのみならず、不協和低減の手段がその期待確認の方向であることを報告した。このことは、Festinger らの不協和理論の考え方の根底に、人は自己自身を合理的で知的であり、よき人間でありたいといった高い自己概念への志向があり、従って、それにもみあう行動をするものと自ら考える傾向があるという暗黙の仮定があったのに対し、Aronson らの考え方は、課題次第で、あるいは一貫して自己概念の低い人がおり、そうした人々にとっては、外顕的には行動結果が社会的に望ましいものであっても、自己概念との不一致ゆえに不協和の状態に陥ることもあると主張するものである。この考え方は、従来の認知要素間の協和一不協和関係の単純な決定が、そこに働く認知者の期待次第で逆転することを示唆する点で注目される。事実、これまでも期待の不確認がある種の情動を喚起させ、特定の行動の顕現性を高めるとの報告は、Tinklepaugh (1928) の動物実験で報告されているが、そこでは期待の不確認効果は negative な期待（好ましくない結果の予測）の場合は見出されず、positive な期待の不確認の場合に限定されることが報告された。人を被験対象とした Harvey & Clapp (1965) は、期待が正か負かが不確認反応の重要な決定因子であると述べているが、Aronson らの主張は、正・負いずれの期待であっても、その不確認は不快

であり、それを低減する動機づけが働くというのである。彼らの知見は、ある課題をうまくやることが出来ないと期待していた者が、うまくやれた時、この事実を自己の期待と不一致ゆえに拒否し、うまくやれないという期待と一致する方向へ課題に関する見振り判断を変えたというものであった。この結果は、よりよい成績を得ようとする達成への動機づけよりも、認知的一貫性への要求の方が大であると主張するものであり、論議をよんだ。これまで、この点をめぐって数多くの研究がなされてきたが、Brock, Edelman, Edwards, & Schuck (1965), Cottrell (1965), Ellsworth (1966) の研究で支持されたが、Waterman & Ford (1965), Lowin & Epstein (1965), Zajonc & Brickman (1969) の研究では結果はあいまいであり、否定的ですらあった。支持する研究においても、しかしその効果は判断過程に限定されている。もしこの考え方が正しければ、見振り判断の変化に限定されるものではなく、行動レベルでの performance の調整が見出されなければならない。Lecky (1945) の術語で言えば、期待レベルの変化は、performance 変化を随伴するからである。これまでの全てのこれらの研究が、顔写真の呈示による分裂症者の判断課題か、一定時間内に光刺激に対する反応を求める反応時間 (RT) 課題であったところに問題があると思われる。前記の Zajonc & Brickman の示唆するごとく、従属変数として performance 変化を測定するには、これらの課題は適切とはいえない。前者では、判断の正誤の手がかりは何もなく、判断基準が不明確であり、後者においては、performance の調整をする上で、motor skill の個人差が制約因子となっているためである。本研究では、認知的一貫性への要求が、Aronson らの言うごとく、ある条件のもとで達成動機以上の作用をするのかどうかに焦点をあて、その知見が判断変化に限定されるのか、行動変化をも結果しうるのかどうかという点を新たな課題のもとで検討するものである。実験のデザインは、Cottrell (1967) に基づいて作成された。

方 法

被験者 学部学生のうち自発的に参加した 48 名（男・女各 24 名）。

実験計画 1 条件 6 名づつ（男・女各 3 名）の 8 群を

¹ A study of disconfirmed expectancy.

² Tutomu Kudoh (Osaka Kyoiku University, Dept. of Psychology.)

³ 一般に期待はずれと表現されるごとく、特定の結果の予測が裏切られた状態である。ここでは、自己の課題に対する成功または失敗の期待が確認されない状態を意味する。

以下の実験操作により設定した。各被験者（以下 S と記す）は、各条件に男女の比率を均等にして、ランダムに割り当てた。本研究で操作した変数は、① 課題の成績に関する期待の高低 (Expectancy; High-Low)、② 試行数の長短による期待の強弱 (Expectancy; Strong-Weak)、③ 最終試行における課題の成績フィードバックの変動 (Feedback; High-Low) である。

手続き これは個別実験であり、実験室に各 S が来ると、実験者は S に対して、“この研究は、人間が長さに対してどのくらい正確な概念を持っているかを調べるものです。”と実験の目的を口頭で説明した。着席後、机上にある2本の普通の定規を使って、所定のグラフ用紙に12 cmの線分を10本書くように S に告げた。この練習試行が完了すると、 S は目隠しをされ、実験者から次の教示を受けた。“練習の時のように12 cmの線分をこれから書いていただきますが、12 cmぴったりの線分でもなくとも11 cm—13 cmの範囲にあるものを成功として1点を与えます。1系列で10本の線分を書いていただきますが、全部所定の範囲内にあれば10点となります。今までの実験結果では、約50%出来る人が最も多いようです。”これに付随して若干の注意が与えられた。実験は、1ブロック10試行で最高5ブロックあり、ブロック内のintertrial intervalは5秒、interblock intervalは1分に統一された。そのブロック数は、以下に述べる期待の強弱の操作とした。各ブロック終了のたびに、 S の達成した成功数(得点)を口頭でフィードバックした。しかし、これは期待の高低の操作によるもので、 S の実際の performance とは全く独立したものであった。実験変数は、以下の通り操作された。

期待の高低の操作 High expectancy condition は、その課題がよくできるという期待を作り出すために、初めの数ブロックでのフィードバックは、8点ないし9点成功と操作された。Low expectancy condition ではその逆に、初めの数試行のフィードバックで、2点ないし3点成功と告げられた。

期待の強弱の操作 期待の強弱は、期待形成の位相であり、ブロック数を Strong expectancy condition では4に、Weak expectancy condition では2に操作した(但し、3ないし5ブロック目に次に述べられる操作が導入される)。

従って、この位相におけるフィードバックは、Strong-High expectancy condition で9点、8点、8点、9点成功、Strong-Low expectancy condition で3点、2点、2点、3点成功、Weak-High expectancy condition で9点、8点成功、Weak-Low expectancy condition で3点、2点成功と、操作された訳である。

最終試行における成績フィードバックの操作 各条件の S のうち半分の者は、最終試行ブロックでのフィードバックが9個成功に操作された(High-feedback condition)が、残り半分の S は、それを3個成功に操作された(Low-feedback condition)。最終試行ブロックは、Strong-expectancy condition では第5試行ブロックであり、Weak-expectancy condition の S では第

3試行ブロックであった。

従って、この最終ブロックでの得点のフィードバックは、 S の半分では期待と一致したものであったが、残り半分の S にとっては期待と不一致になっている。この最終試行ブロックの得点を各 S に知らせたあと、実験者は申し訳けなさそうに次のごとく告げた。“実は、この回の所要時間を計るのを忘れていました。すみませんが、もう1ブロックやっていただけますか?” S 全員の了解のあとで実験者は、今度の得点を本当の得点としますと告げた。この際、実験者は既に S に与えた第1ブロックから放棄することになった最終ブロック(第3ないし第5ブロック)までの S の得点をもう1度復し、それから代理の10試行を求めた。この試行後には、その performance に関するフィードバックを何も与えず、代わりに関連質問と実験の感想を聞き実験は完了した。

従属変数 期待の確認・不確認に伴う performance の変化の測度は、放棄した試行ブロックで得られた長さの平均値と、繰り返した代わりの試行ブロックにおける長さの平均値との差の絶対値(粗点)である。従って、performance を変化した者ほど、この値は大きくなる。これに関連して、 S 自身の課題に対する見積りの評定は、次の質問項目によっておこなった。“あなたは、代わりにおこなった最終の試行ブロックで何点取れたと思いますか。0点—10点の11点尺度上に取れたと思う得点をチェックして下さい。”この質問は、何点取り〈たい〉という want 点でも、何点取ろう〈とした〉try 点でもなく、何点取ったで〈あろう〉という probability 点で答えさせたものである。また、緊張の度合を次の質問により測定した。“今、あなたはどのくらい緊張またはくつろぎを感じていますか。”これは、非常に緊張した(1) —非常にくつろいだ(11)の11段階尺度上にチェックさせた。

結 果

各実験条件で得られた従属変数の平均変化得点は、Table 1の通りであった。表中の feedback の欄は、放棄された最終試行でフィードバックした得点の高低のことである。performance change は millimeter 単位であり、表示した数値は、変化得点の絶対値である。

成功の見積り判断 最終試行の代わりに行なった10試行中で、何回成功したか、試行後に S の見積り平均得点は、各条件ごとに Table 1 の column 1 に示されている。Table 2 は、その分散分析の結果である。表から期待水準で1%の有意な差があった($F_0=33.69$, $df=1/43$, $p<0.01$)。このことから、期待の高低の実験操作は首尾よくいったことが知られる。すなわち、期待レベルで高い(あるいは低い)期待をこの課題に関して形成された者は、最終試行の成績フィードバックに関係なくその期待と一致した成績を見積ったのである。また、feedback レベルで5%の有意差が認められた($F_0=4.69$, $df=1/43$, $p<0.05$)。このことは、最終試行におけるフ

TABLE 1

Means of number of successes estimates, changes in task performance and ratings of tension for the eight experimental conditions (Each mean is based on six cases)

Experimental conditions		Success estimates	Performance change	Tension ratings
Weak expectancy				
Expectancy Feedback				
Low	Low	3.00	15.78	6.0
Low	High	5.33	10.53	4.8
High	Low	7.17	16.55	6.2
High	High	7.67	7.90	6.3
Strong expectancy				
Expectancy Feedback				
Low	Low	3.67	10.55	6.3
Low	High	4.67	12.98	5.2
High	Low	7.17	20.85	6.3
High	High	8.50	9.70	5.3

ィードバックで、高い（あるいは低い）得点を与えられた者は、次の代理試行後の見積りでよくできた（あるいはできない）と報告する傾向を示している。期待の強弱の主効果は見出されなかったが、3要因の交互作用は1%水準で有意な差があった ($F_0=13.65$, $df=1/40$, $p<0.01$)。そこで、不協和の喚起されたと想定される条件と喚起されていないと思われる条件の平均の差を Scheffé 法により検定したところ、Weak expectancy condition の Low-High 群と Low-Low 群の間で5%の有意な差があった。更に、Strong expectancy condition の High-High 群と High-Low 群の間に5%にみたないが有意な傾向性が見出された。他の条件間の比較は有意でなかった。かくて、期待とくいちがった feedback が、課題への見積り判断に影響を与えたのは上記2条件だけであった。

課題に関する Performance の調整 期待と一致した、あるいは、不一致なフィードバックを受けたことによる課題に対する performance の平均変化量は、Table 1 の column 2 に示されている。Table 3 はその分散分析の結果である。feedback レベルで5%の有意な差が認められた ($F_0=4.09$, $df=1/44$, $p<0.05$) が、他の主効果は有意でなかった。このことは、最終試行で低い得点を得たものは、代理試行において課題の performance を大きく変化させたことを示すものである。交互作用に関しては期待レベルと feedback レベルで有意な傾向性を若干認め得た ($F_0=2.38$, $df=1/43$, $0.10<p<0.20$)。このことから、不協和の喚起されたと考えられる条件とそうでないと思われる条件の平均の差を Scheffé 法により検定したところ、次の結果を得た。Weak-Strong

TABLE 2

Analysis of variance for success estimates in Table 1

	SS	df	MS	F_0	p
Expectancy strength (A)	0.5	1	0.5	0.17	
Expectancy level (B)	143.5	1	143.5	33.69	$p<.01$
Feedback level (C)	20.0	1	20.0	4.69	$p<.05$
A × B	0.6	1	0.6	0.14	
B × C	1.8	1	1.8	0.43	
C × A	0.3	1	0.3	0.07	
A × B × C	21.3	1	21.3	13.65	$p<.01$
Error	62.5	40	1.56		

TABLE 3

Analysis of variance for performance change in Table 1

	SS	df	MS	F_0	p
Expectancy strength (A)	5.55	1	5.55	0.02	
Expectancy level (B)	19.89	1	19.89	0.08	
Feedback level (C)	383.64	1	383.64	4.09	$p<.05$
A × B	61.88	1	61.88	0.24	
B × C	216.32	1	216.32	2.38	$.10<p<.20$
C × A	22.85	1	22.85	0.09	
A × B × C	75.08	1	75.08	0.29	
Error	3746.12	40	93.65		

expectancy をこみにした場合、High-Low 群 ($\bar{X}=18.70$) と High-High 群 ($\bar{X}=8.8$) の間で5%の有意な差があった。期待の高い者が低い得点をフィードバックされると、期待一致群と比べて課題に対する performance を代理試行において調整する傾向が大なることを示している。また、同じ期待不確認群である Low-High 群 ($\bar{X}=11.76$) と High-Low 群 ($\bar{X}=18.70$) の間で、同様の有意な傾向性が見出された。このことは、課題に対する自己の期待が低く、得られた得点が高かった者の performance の調整に比べて、初めの期待が高くフィードバック得点の低かった者の方が、有意に performance を調整する傾向を示している。他の条件の間では、平均の有意な差は見出されなかった。

緊張—くつろぎの自己報告 期待の一致・不一致により、経験された緊張の平均値は、Table 1 の column 3 に示されている。分散分析の結果、feedback レベルで若干の有意な傾向があった ($F_0=2.02$, $df=1/44$, $0.10<p<0.20$)。期待のいかんにかかわらず、最終試行で

低い得点をフィードバックされた者は、高い得点をフィードバックされた者に比べて緊張したと報告する傾向が認められた。他の主効果および交互作用は有意でなかった。このことから、期待が確認されなかったからといって、そうでない者と比べて緊張しているとはいえないことになる。

考 察

得られた結果は、Aronson らの命題および不協和効果は判断反応に限定されるとした Cottrell (1967) の研究結果と著しく異なり、期待の不確認は、認知的不協和を喚起するというより、むしろ達成への動機づけを喚起させることを示唆するものである。課題の performance の調整において、Weak-Strong expectancy 条件をこみにした場合、不協和が喚起されたとすれば、その低減のために、Low-Low 群 ($\bar{X}=13.16$) より以上に有意に大きく Low-High 群 ($\bar{X}=11.76$) で performance の調整がなされなければならない。しかし、結果は、有意でないが逆の平均得点を示している。この調整が Low-High 群で少ないのは、High というフィードバックを凍結しておこうとする傾向、すなわち、ある Ss が実験後の面接で述べたごとく、“良い点に越したことがない。”との陳述の中に、達成への要求をくみとることができよう。同じく、期待不確認の条件であった High-Low 群 ($\bar{X}=18.70$) が、performance を最大限変化させ、期待一致群の High-High 群 ($\bar{X}=8.80$) でその調整が最も少ないことを考察すれば、High-Low 群の結果を、不協和過程と判断過程の共同関数と考え、あいまいに残すべきでなかろう。全体的結果は、達成への動機づけの作用を支持する傾向にあるからである。見積り判断の結果は、performance の調整と対応したものである。すなわち、期待の不確認により不協和が喚起されるなら、Low-High 群では見積り判断を低くし、High-Low 群では逆に、成功の見積り判断を期待と一致して高めるはずである。結果は、両条件とも予測と全く逆であり、Weak expectancy の Low-High 群と Strong expectancy の High-Low 群は、それぞれコントロール群（期待一致群）と有意な差が既に報告された。そこでは、最終試行におけるフィードバック得点の高低が決定因子であった。他のもう 1 つの指標、緊張度、に関しても、最終試行で低いフィードバックを与えられた者の方が、高い得点を与えられた者と比べて、緊張したと報告しているが、これは、不協和喚起を示すものではなく、むしろ、達成動機の脅かしと解釈されるであろう。期待一致群と不一致群の間に有意な差が認められないからである。本研究は、長さの概念という新しい課題と、見積り判断が、将来の判断でなく、仕終わった課題に対する判断を指標とした点で、他の研究と異なっている。従って、perfor-

mance の調整の指標で達成動機支持の結果を得たことは、調整が比較的容易であった点に帰せられるであろう。また、見積り判断においては、将来の見積り判断では現われぬ“反省”の要因も入ったものと思われる。しかし、こうしたちがいににかかわらず、期待の不確認による認知的不協和の存在、その低減の試み、の形跡は見出されなかったと結論される。

要 約

期待の不確認が、認知的不協和を喚起させ、その不協和と低減の試みが、判断反応のみでなく行動レベルでの変化が見出されるか否かを調べる目的で、新しい課題を用いて検討した。48 名の学部学生を 6 名ずつ、それぞれ異なる 8 条件に分配した。独立変数は、期待の強弱・期待の高低・期待と一致・不一致の feedback により操作された。もっとも不協和過程の特徴となる negative な期待の不確認状態で、不協和の喚起された証拠は得られなかった。むしろ、performance の調整・成功への見積り判断、更には、緊張度の自己評定といった従属変数に現われた変化は、達成への動機づけが強力に作用していることを示していた。従って、positive な期待の不確認状態における各指標の変化も、達成動機づけによってよりよく理解されるものであった。Aronson らの命題は、理論的にありうることであるが、本研究のごとく、実験者との対人場面においては、達成動機づけ（少なくとも、Ss の内部に negative な評価を受けることの回避）が働くため、それを排除した実験計画が要請されるであろう。認知的一貫性への要求が、達成動機を〈越えて〉強力だとするところに問題が残されたといえよう。

引 用 文 献

- Aronson, E., & Carlsmith, J. M. 1962 Performance expectancy as a determinant of actual performance. *J. abnorm. soc. Psychol.*, **65**, 178—182.
- Brehm, J. W., & Cohen, A. R. 1962 *Explorations in cognitive dissonance*. New York: Wiley.
- Brock, T. C., Edelman, S. K., Edwards, D. C., & Schuck, J. R. 1965 Seven studies of Performance expectancy as a determinant of actual performance. *J. exp. soc. Psychol.*, **1**, 295—310.
- Cottrell, N. B. 1965 Performance expectancy as a determinant of actual performance: A replication with a new design. *J. pers. soc. Psychol.*, **2**, 685—691.
- Cottrell, N. B. 1967 The effect of dissonance between expected and obtained performance upon task proficiency and self-estimates of task proficiency. *J. soc. Psychol.*, **72**, 275

- 284.
- Ellsworth, P. C. 1966 Dissonance reduction from the subject's point of view. *Paper at the meeting of the American Psychological Association*, New York.
- Festinger, L. 1957 *A theory of cognitive dissonance*. Evanston. Ill : Row-Peterson.
- Harvey, O. J., & Clapp, W. 1965 Hope, expectancy, and reactions to the unexpected. *J. pers. soc. Psychol*, **2**, 45—52.
- Lecky, P. 1945 *Self-consistency, a theory of personality*. New York : Island.
- Lowin, A., & Epstein, G. F. 1965 Does expectancy determine performance? *J. exp. soc. Psychol*, **1**, 248—255.
- Tinklepaugh, O. L. 1928 An experimental study of representational factors in monkeys. *J. comp. physiol. Psychol.*, **8**, 197—236.
- Waterman, A. S., & Ford, L. H. 1965 Performance expectancy as a determinant of actual performance : Dissonance reduction or differential recall? *J. pers. soc. Psychol*, **2**, 464—467.
- Zajonc, R. B., & Brickman, P. 1969 Expectancy and feedback as independent factors in task performance. *J. pers. soc. Psychol*, **11**, 148—156.

——1971. 9. 18. 受稿——